

日本音楽教育メディア学会
(JAPANESE MEDIA SOCIETY FOR MUSICAL EDUCATION)

JMSME News Letter

2024.7 vol.19

発行：令和6年7月15日

日本音楽教育メディア学会事務局

〒125-0062 葛飾区青戸 5-5-16

メールアドレス info@jmsme.org

ホームページ

<https://jmsme.org/>

ご挨拶

会長 田中功一

今年も暑い日が到来しますが、先生方はお元気にお過ごしでしょうか。全国各地で異常な豪雨による災害が起こっています。被災された方々、また能登半島地震により被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

この度「音楽教育メディア研究 Vol. 10」の発刊が遅れましたことをお詫び申し上げます。昨年の Vol. 10 も大幅に遅れてしまい、二年続きの遅延となりました。その対応のため、発刊に先立つ早期公開の推進を、J-STAGE 公開論文だけでなくホームページ公開論文・研究報告・口頭発表原稿についても Vol. 10 から進めると発表しましたが、この早期公開も全く達成できずに終わり、誠に申し訳ございません。早期公開を学会の特徴の一つに掲げてきましたが、実施するのが困難なため、早期公開については今回の対応を撤回し、従来の方針（J-STAGE 公開論文のみ J-STAGE に公開する）に戻したいと思います。何卒ご容赦ください。

今年3月に学会のホームページをリニューアルいたしました。ホームページの更新は、これまで一元管理でしたが、今後は複数の理事による分散管理になります。あらたに、会員による投稿と投稿へのコメントの機能を追加いたしました。投稿は本学会の趣旨に沿った内容（会則第2条、第3条）とします。学会会員の皆様には学会に関連する情報発信が可能です。また、ご自身が関連する他学会の情報、またご自身のコンサートや作品発表の情報の投稿も可能です。この件についてはホームページの「投稿・コメント」をご覧ください。



日本音楽教育メディア学会 第11回総会、第19回研究会のご案内

日時：2024年8月11日（日）

場所：葛飾シンフォニーヒルズ 別館 4階 ライラック

11:00～12:00 総会

13:00～14:00 口頭発表

14:10～16:00 **アフタヌーンティー** ☕

（お茶を飲みながら話題について話しませんか？）

会場とオンライン（Zoom）でのハイブリッド開催となります

参加費：会員無料 非会員 1,000円（事務局に参加お申し込みください）

17:15～懇親会（青砥駅周辺予定）

事務局：info@jmsme.org

【口頭発表】（発表20分、質疑応答10分）

13:00 高等学校音楽科教材『歌の翼に』の日本語歌詞に関する研究②
ードイツ語のサウンドに基づいた日本語歌詞、演奏の試みー
飯泉琴都（武蔵野音楽大学の研修員・二期会オペラ研修所の本科研修生）

13:30 「都節音階を用いた音楽づくりにおける、子どもたちの創作過程とフロー体験」
岡田 愛（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・院生）

休憩

【アフタヌーンティ】

14:10 話題1「生成AIとチャットGPTについて」

休憩

15:10 話題2「サウンドエデュケーションについて」



Column 「24の調性に隠された情感」

各々の調性にはそれぞれに色彩感があり、その色彩感から得るインスピレーションは、音楽家にとっての表現に欠かせないものとなっている。今回はまず「ハ長調」を取り上げ、そこに共通すると考えられる発想を考察していきたい。

24 調を網羅している作品といえば、まず J. S. バッハの平均律が頭に浮かぶだろう。1 巻 1 番のプレリュードは、清らかなイメージで心を落ち着かせてくれるような曲である。



また、同じく 24 調を網羅している作品といえば、ショパンのプレリュードを思い起こす。



冒頭に記載されている Agitato (激しく) は、A. コルトーが自版の前文に書いたように「愛される女性の熱っぽい期待」を象徴している。

上記の 2 曲は同じハ長調でも、全く違う印象である。さらに、ベートーヴェンのピアノソナタ op. 53『ワルトシュタイン』や、シューベルトの『さすらい人幻想曲』op. 15 では、これから何か新しいものに向かっていく期待や解放を感じることができるだろう。

第 1 曲「メロディー」(Mäßig bewegt-中くらいの速さで)



第 3 曲「ハミング」(Nicht schnell-速くなく)



第 5 曲「小曲」(Nicht schnell-速くなく)



それでは、調性から得る発想を紐解く手がかりとして、表情記号や表題を多く記しているシューマンの『ユーゲントアルバム』op. 68 では、ハ長調をどのように使用しているか見ていくことにする。娘のために書いたとされているこの作品は短い中にも多くの情景や心情が隠されている。

そして、第 18 曲「刈り入れの歌」(Nicht sehr schnell-速すぎず)、第 21 曲「***」(Langsam und mit Ausdruck zu spielen-ゆっくり気持ちを込めて弾くこと)、第 34 曲「主題」(Langsam. Mit inniger Empfindung-ゆっくり。心から愛情を込める気持ちで)と、前 43 曲中計 6 曲がハ長調で書かれている。穏やかなテンポと気持ちを込めて演奏することへの指示が目立つ。長女マリーの健やかな成長を願うような優しい語り口調の旋律が、私たちの心を打つ作品だ。

(武蔵野音楽大学 森永美穂子)

～100年のジェネレーションギャップ～

現在、いくつかの文部省唱歌をはじめとする明治期の唱歌は、音楽科の歌唱共通教材として「こころのうた」というタイトルのもと、教科書に掲載され、歌い継がれている。「こころのうた」と称されるくらいのものであるから、日本人の感性を表している歌と考えられる。確かにその成立期は、日本における西洋音楽の黎明期であり、そのような時期に西洋音楽を真摯に学んだ作曲家（主に東京音楽学校の作曲教師）が創作したものであるから、今日のような多様な音楽が流れている時代と比較すると、その混じりけの少なさからも「日本人の感性」を表している歌なのかもしれない。おそらくその奏でるメロディーやハーモニー、すなわちサウンド自体はそういつてもいいのかもしれない。

しかし、歌詞は事情が異なる。作詞家（主に東京音楽学校や東京帝国大学の教師）の多くは日本人の思想や感性をつくることに加担したといっても過言ではない。なぜなら明治期の唱歌には地名が一切出てこず、日本のどこにいても同じ情景を思い浮かべ歌う歌詞であった。そして、「〇〇とはこういうもの。」と、歌によって国民の思想形成に助長した。これがのちの戦意高揚のための歌の誕生につながる。

ちなみに唯一地名が登場する曲があるがそれは「蛍の光」である。今は一切歌われることのない3番と4番に日本列島を地名がたくさん登場する。明治期の子どもたちは、「豊かな情操を培う」ために歌ったのではなく、「日本人になるため」に歌った。100年前の子どもたちがタイムスリップして現代に来たらどのように歌を歌うのだろう。

《会員メッセージ》 小林田鶴子（神戸女子大学）

先日、NHKの新プロジェクトX「トットちゃんの学校」を見た。黒柳徹子さんが学んだ「トモエ学園」の物語である。「窓際のトットちゃん」でも紹介されている小林宗作校長は、日本の一律的な教育に絶望し、欧州に渡ってリトミックを見たことがきっかけとなり、子どもたちの自由な教育の場を作った。今から約90年も前に子ども一人ひとりの個性が輝く教育を実践していたというのも驚くべきことであるが、そのきっかけが、音楽・芸術教育であったというのも象徴的である。そして、この実践は現在の教育のキーワードとなっている「ダイバーシティ」の魁ともいえる。

ところで、最近私は大学教員になる前に行っていた「創才教育」を30年ぶりに始めた。「創才」とは数学者である広中平祐氏の造語で、「天才」や「秀才」のような特別な才能ではなく、誰もが持っている創造性の才能を指す。

近年のAIの発達により、創造性すらもAIにとって代わられるのではないかと懸念もあるが、広中氏たちがAIと人間の違いは何かと考えた時の答えは次のようなものである。「AIはデーターを与えると動き始めるが、人間はデーターばかりだと眠くなる。人間が動き始めるのは、夢と希望を持った時である。」

教育とは、まさに、この夢と希望を子どもたちに与えることではないだろうか。小林宗作がトットちゃんに「君は本当はいい子なんだよ」と言い続けてきたことにより現在の黒柳徹子が在る。

私も「創才教育」が子どもたちの未来を輝かせるようになることを願う。

《会員メッセージ》 辻 靖彦（放送大学）

2024年現在、生成AIは急速に進化し、さまざまな分野に影響を及ぼしています。特にドキュメントの作成やチェック、改善提案などにおいて、生成AIは大きな力を発揮しています。大学のレポートや就職活動の職務経歴書など、決まった目的に沿った文章のチェックに生成AIが有効であることが、実践研究で示されています。

また、楽器演奏の練習支援にも今後、生成AIが有効になる可能性があります。生成AIというと自動作曲を連想する方が多いかもしれませんが、AI技術を活用することで楽器の練習がより効率的かつ効果的になることが期待されます。ここでは、二つの具体的な活用方法を考察します。

一つ目は、演奏に対するフィードバックです。例えば、練習した演奏を録音し、生成AIに聞かせることで具体的なアドバイスを得る方法があります。2024年現在、単一の楽器によるシンプルなフレーズでの録音でないと、AIによる内容の認識は難しいようですが、これまでの先行研究でも特徴量を抽出して熟練者と比べることで具体的なフィードバックが得られることが示されていますので、その手法とAIを組み合わせる方法が考えられます。

二つ目は、練習方法に関するアドバイスです。生成AIは、楽器の基本技術や練習パターンに関する豊富な知識を持っています。例えばドラムの練習において、自分の体型に合ったスティックの選び方や、自分が課題と感じている部分を克服するためのルーティメンツ（ドラムの基本パターン）の練習方法についてAIに相談する、といったことが可能です。

これらの方法は、これまで実現が難しかった支援方法であり、生成AIの急速な発展を考慮すると、今後ますます利用価値が高まると考えられます。生成AIの動向や最新技術を注視していく必要があります。

会員掲示板



定価 2,200 円（本体 2,000 円＋税）

Die Taubenpost

ドイツ歌曲研究演奏会 2024

Vol.51
 10/13(日)
 開場 18:00
 開演 18:30

Vol.52
 11/23(土)
 開場 17:30
 開演 18:00

チケット(全席自由)
 各回 ¥2,000
 通し券 ¥3,000(限定10枚)
チケットの申込みはドイツ・タウベンポスト事務局
 または出演者にて承ります。

会場 ルーテル市ヶ谷
東京都新宿区市ヶ谷七丁目1-1
 電話: 03-3209-0821

◆各線 市ヶ谷駅下車◆
 都営線 地上出口 徒歩7分
 有楽町線 A1出口 徒歩7分
 有楽町線 5.6番出口 徒歩7分
 有楽町線 5.6番出口 徒歩7分

お申込み・お問合せ Die Taubenpost事務局
 ensemble@freude@gmail.com

Vol.51 10/13 出演者・演奏予定曲

橋谷佳子 (Sop.)
 渡辺佳子 (Sop.)
 H. シュミット
 セレナード (ジャック) Op.17-2
 サラ・カール (アルミニ) Op.48-3

橋谷佳子 (Sop.)
 田中実子 (Pl.)
 H. シュミット
 少年と女 (アメリカ)
 おぼろ (グラー)

橋谷佳子 (Sop.)
 田中実子 (Pl.)
 E. コルンゴルト
 少年の歌 (ストラウデン/コルンゴルト)
 Op.22

青木実子 (Sop.)
 川瀬静子 (Pl.)
 だから歌の空はそんなに青いの? (レアンダー)
 Op.2-2
 いっしょのように (アイヒンゲン)

ほか

Vol.52 11/23

新井大祐 (Sop.)
 伊藤真由 (Pl.)
 ドン・ヘンゼル
 ドン・ヘンゼル (グレンジャー)
 R. フランツ
 春と愛 (アタカスレーベン) Op.3-3

新井大祐 (Sop.)
 伊藤真由 (Pl.)
 R. フランツ
 春と愛 (アタカスレーベン) Op.3-3

橋谷佳子 (Sop.)
 田中実子 (Pl.)
 トスカ・地方の民謡によるワルツの歌 (グレンジャー) Op.6

橋谷佳子 (Sop.)
 田中実子 (Pl.)
 トスカ・地方の民謡によるワルツの歌 (グレンジャー) Op.6

飯泉祐美子先生が第10章を執筆されました。

10章 子どもと年中行事、伝承遊び

- 10-1 子どもと年中行事、生育儀礼
- 10-2 伝承遊び
- 10-3 伝承遊びの種類

飯泉琴都さん
 が出演される
 演奏会です。

会費納入のお願い

8月1日より2024年度となります。

2024年8月1日～2025年7月31日の年会費の納入をよろしくお願いいたします。

《振込先》 ゆうちょ銀行 10510-91267401

他銀行よりお振込みいただく場合：

店名 058 店番 058 (普) 9126740

ニホンオンガクキョウイクメディアガッカイ



※入会・退会に際しまして、又、会費についてご質問等ございましたら事務局までご相談ください。

事務局だより 🌻 高校野球大会の季節が巡ってきた。全国様々な校歌を聞けるのも高校野球の楽しみの一つだ。かつてこの校歌が大切な役割を果たしたことがあった。熊本地震（2016）の際、地元のコミュニティ FM 局（当時は災害放送局として放送）が市民からのリクエストに応じて市内の各小学校の校歌を順次放送した。避難所のラジオから校歌が流れると、はじめは子どもたちが歌い出し、次に高齢者や大人が歌い、避難所が歌声に包まれ、避難生活をしている方々が大いに勇気づけられたという。地域の風土が歌い込まれ、世代を超えて人々をつなぐことのできる校歌は、紛れもなく地域の文化財である。音楽と教育とメディアの接点とも言える高校野球、その地方大会や全国大会の放送を、時代を超えた校歌のアーカイブとして捉え直すこともできるのではないだろうか。（兼古）